

あの日の 決断

岩手の経営者たち

西部開発農産

▽②△

照井耕一さん

北 上市和賀町後藤の西部開発農産の前社長、照井耕一さん

(74)が、個人営農から法人営農に切り替えたのは41歳の春。法人化を勧めたのは、元北上農業改良普及センター所長の古川嘉雄さん(77)と花巻市東和町落合だった。

古川さんは当時、県の農業改良普及員として和賀町地区を担当。照井さんと仕事を通じて交流があった。農村人口の減少、担い手の育成、経営基盤の強化は今と変わらぬ課題だった。

古川さんが照井さんを見込んだのは、農業への真つすぐな姿勢。「とても情熱的で、人一倍働いていた。農作業の協業化は徐々に進んでいたが、法人組織はまだ少なかった。古川さんは税制や資金繰り、補助事業の導入など法人化のメリットを訴え、照井さんのやる気を刺激した。

照井さんは若い頃から、「リーダーシップを取れる人間になりたい」と思ってきた。きっかけが、27歳で訪



現事務所の斜め向かいにある創業当初の事務所。壁はトタンの簡易な造りで、今は各種資材などの倉庫になっている＝北上市和賀町後藤

法人営農への切り替え 「現場主義」変わらず

れた欧州7カ国の酪農視察。県の事業に、地域からただ一人推薦された。照井さんは「報告会などで海外の話をするようになり、自分が先に立つてやらないといけない気持ちが生えた。そのために、信用される人間にならなければと思った」と振り返る。

行政や農協の支援もあり1986年、小麦50畝、大豆3畝の作業受託から会社をスタートした。メンバーは、自分と現専務の小原信正さん(60)ら個人の頃から一緒に働いていた3人。古川さんは同社に足しげく通い、規約や作目別の収支計画作りなど手弁当で世話した。

「古川さんは和賀から転勤した後も休日などに来て、経営をみてくれた。ものすごく感謝している」と照井さん。2人の付き合いは、現在も続いている。

照井さんが法人化に当初期待したのは、補助金の受給。立ち上げると、それは二の次だった。3、4年後から会社への視察が増え、注目度がアップした。企業経営という安心感から、人材が集まってきた。

経営者となっても変わらなかったのが「現場主義」。夏は午前3時半起きで農地に行き、規模拡大が進んでも週末は社員の代わりに農業機械を動かした。

「例えば、稲の苗は日が昇る前に見て、先端につゆが上がっていれば健康。豆の伸びが悪ければ、土に酸素が少ない。作物は生きていて心があるから、行って声を聞かないといけない。自分で聞いて、社内で話すことで社員は育っていく」

経営を離れ、やることは一つ。赤いつなぎ姿で、今日も土のおいをかぐ。

農業はプロだが、企業経営は素人だった。資金繰りには苦しめられた。